

無住『雑談集』について

——「愚老述懷」の段をめぐって——

大 隅 和 雄

—

鎌倉時代後半、尾張の廢寺を再興してそこに住し、庶民の教化に尽くした無住は、一般には『沙石集』の著者として知られている。『沙石集』は、無住が、その後半生をかけて砂と石をもって磨き続けた珠玉の集成であり、深い人間洞察にもとづく一段一段の文章は、何世紀にもわたって多くの読者を惹きつけてきた。現代では、民間の話題を多く取り込んだ特異な姿を伝えた書として、また一宗に偏しない立場で鎌倉時代の仏教の具体的な姿を伝えた書として、中世の文学、歴史、宗教を考えようとする人々の間で注目されている。

無住は、『沙石集』の他に、仏教の教説をまとめた『聖財集』、それを簡約して世俗一般の人々にも読めるように説いた『妻鏡』、最晩年になって、心に浮かぶさまざまなことを書き留めた『雑談集』という三部の書を書いた。民間の布教僧が、東海の地で四部の書を著したということは、京都と南都、その周辺の古代以来の寺院、また東国の中心としての鎌倉などから離れた所でも、書物を書

くという営みが続けられるようになるという、この時代の文化の新しい動向をあらわしている例の一つと考えることができる。無住とその述作は、鎌倉時代の思想や文化の動きを考える上で、重要なてがかりを与えてくれるように思われるが、それぞれに性格の異なる四部の書を見渡して、その相互の関係を考え、無住の全体像を明らかにしようとする試みは、まだ充分になされてきたとはいえない。無住といえど、『沙石集』の著者というように、人々の関心が主著『沙石集』にばかり集中してきたからである。

ここで取り上げる『雑談集』は、十巻からなる書であるが、『沙石集』と重複する説話が少なくないので、その記事は『沙石集』研究の傍証として重んぜられてきたし、無住が、書中でしばしば自身自身のことを語っているために、無住の伝記研究のための貴重な資料として読まれてきた。しかし、その『雑談集』自体がいかなる性格の書であるのかをめぐっては、先に記した通り、論議は尽くされていないように思われる。

ここでは、われわれが、鎌倉時代の思想史を考える際に、『雑談

『雑談集』をてがかりに考えることができるさまざまな問題のうち一、二を記してみることにはしたい。

二

『雑談集』は、一般に「説話集」という書目に分類され、説話文学研究の対象として知られている。たしかに、全十巻の内容は、配列に体系的を読み取ることの困難な七十三の短編集であり、一段ごとに、「自力他力ノ事」「天台ノ一宗、因縁所生法、我説即是空等ノ法門ノ事」というような、仏法の教義に関する題や、「人ノ母子ヲ念フ事」「京ニアル女房ノ女メニ後レテ道心発ス事」というような説話的な題を付けて、まとまりを持っている。また、教義の説明を主題とした段にも、実に巧みに数々の説話を引いており、説話集という項目に分類することが、特に不適切というわけではない。

従って、『雑談集』は、一見説話集というにふさわしい書のように見えるが、いくつかの段を読んで行くと、全体を説話集と呼ぶのが適切であるかどうかは、疑問になってくるであろう。各段は、思いつくままに取り上げられた主題をめぐる、無住の感懷を述べたものであり、話題を展開させるために経論の文言を引用し、詩文や古歌、さらに説話の一節を引いたり、場合によっては無住の身近な見聞を引き合いに出して、いわんとする所を効果的に述べるといふ形になっている。

たしかに『雑談集』には、説話文学の研究者にとって興味深い説話が、数多く鏤められている。しかし、全十巻は、説話を蒐集することを目的として編纂されたものではなく、説話がつぎつぎに並べ

られてはいても、それらは著者無住の主張を、わかり易く述べるための例として記されたり、的確に伝えるための寓話であったりするわけで、一つ一つの説話は無住自身と密接な関係を持っており、説話集の編者が興味深い説話を蒐集し、それらを分類したり配列に心を配ったりしたのとは違っている。

そう考えると、『雑談集』は、数多くの説話を包み込んだ随筆を集成した書というのが、最も相応しいように思われる。無住晩年の随筆集というのではあまりに一般的で、具体性に欠けるというのであれば、平易な法話、語録を集成したものといってもよいように思われる。

『雑談集』は、鎌倉新仏教の活動が一段落した後の時代に生きて、庶民教化に生涯を送った無住の晩年の思想を、多面的に伝える書として興味の尽きない古典である。それは『沙石集』とともに、多くのことを知らせてくれるであろう。しかし、中世的な謙辞であることはいうまでもないとしても、まさにその題名の通りの『雑談集』の中で、融通無碍に述べられる著者の思想の全体を捉えることは容易ではない。ここでは、『雑談集』の文章に色濃く現れる、自己弁明、自己弁護的なことばと表現をめぐる、『雑談集』の特色を考え、無住の思想を捉えるてがかりを探すことにして見たい。

『雑談集』第三巻の巻末に、「愚老述懐」という段がある。全巻の中で比較的長い文章からなるこの段は、無住が自分自身の一生を回顧してその感懷を述べたもので、簡略ではあるがいわば自叙伝のような記述を含んでいるために、多くの人々に注目されてきた。庶民教化に尽くした特異な遁世僧であり、説話集の編者として重要

な位置を占める人物と考えられながら、伝記史料の乏しい無住の行実を知るために、この段は極めて貴重な記述なのである。そのため、この段に注目した人々は少なくないにもかかわらず、人々はそのから年譜的な事実を読み取ることにのみ急で、この段の趣旨と文章の特質については、充分な検討が加えられていないように思われる。

そこで、まず「愚老述懐」の全体を眺めることから問題に接近することにした。四百字詰原稿用紙に書けば、二十枚ばかりの長さのこの段は、大きく分けると次ぎの五つの部分からなっている。

一、無住は出家した後、まだ若いのに、師の僧から院主の職を譲られることになった。しかし、無住は、世事を捌く経験も能力も持っていなかったので、繰り返し辞退したが、事情があつて辞退しきれず、住職の座についた。しかし、間もなく遁世者となつて寺を離れたことを記す。

付1、『涅槃經』の一節を引いて、仏の教えに入るには人それぞれ道があり、遁世の道に入つたのも、自分としてはこうなるより仕方がなかったと回顧する。

2、人を導く方法はさまざまであることを、鳥羽法皇と橘俊綱の説話を例として説明する。

3、父の思ひ出話、信州のゆかりの人の話を記して、修行の方法も一樣ではない事を述べ、遁世者の自分が貧寺で人々を教化しているのも、それなりに一つの道であることを主張する。

二、自分自身の誕生、家の没落と出家、遁世者として諸国を遍歴

した間の学問と修行の経歴を記述したのち、長母寺で四十三年間、自分に相応しい生き方に徹することができたのは大果報の生涯であつたと述懐する。

付1、北条時頼と自分を比較して、遁世者の果報を述べる。近代の名匠に仏法の大綱を聞けたこと。諸処の名所、靈寺、靈社を遍歴することができたこと。この二つは、時頼の得られない果報であるという。

2、特に遁世者の果報として、貧なるが故に人に害される心配のないことがあげられる。十万町の土地を持つ時頼に比して、十町ばかりの寺領しかない長母寺に住む者の自由を説く。

三、仏法では、乞食頭陀を上行とする。乞食を行ずる者は、四海を自分の家として、国王もそれを臣とせず、父母も子としないという。そう考えると、遁世の身となつた自分は、仏法の理想に近い生活を送っていることになる。

付1、白楽天、勝軍論師などの言を引いて、貧の憂うべからざることのべ、長母寺の貧しさを記す。

四、北条時頼が、父義時の強運を受け、世俗的な世界で大きな果報を得ることができたのは、仏法に帰依した功德であると述べる。

付1、泰時の話を引いて、時頼が多くの徳を背負っていたことを説明する。

2、松下禅尼が上東門院を慕つたことをあげ、仏法に帰依することの重要さを述べる。

五、仏の門に入り、遁世者として生涯を送ってきたが、思うよう

な同法、しもべのいないことを嘆き、心を同じくする者、遁世の心を理解して自分を助けてくれるしもべに恵まれないのは、自分自身が父母師長に仕えなかった罪業によると述べる。

付1、經典からの引用や歌を並べながら、自身の孤独を述べる。

少し要約と説明が長すぎたが、以上が「愚老述懐」の梗概である。まず序の部分といってもいい第一段は、自分の生涯を回顧するこの文章が、自身の遁世者としてのあり方をめぐってのものであることを説明した部分である。ついで第二段は、自身の生いたちから説き起こし、諸師の門を叩いて諸宗の教えを学んだことを記した後、ついに遁世者となったことを我が身の果報であったと述べる部分で、愚老述懐の本体をなす部分となっている。第三段は、遁世者が貧賤の者として蔑まれるのを駁して、仏法の教えの実践として貧に徹することが重要であることを説き、第四段では、仏法の加護の大きさを述べるわけであるが、最後の第五段で、真の仏法を理解する人は少なく、遁世者として生きる者が孤独であることを記して述懐を終わるというわけである。

そこで、もう一度この段の全体を振り返って見ると、この段が単に生涯を回顧した自撰年譜的なものではなく、そこで一貫して述べられていることは、遁世者無住の貧窮と孤独の生活が、世間の人々から蔑視されるようなものではなく、仏法の精神を体現したものであることの弁明であったことがわかるであらう。そこで、「愚老述懐」の弁明、弁解の語り口と、その文章についてもう少し考えてみ

たい。

三

「愚老述懐」の文には特に多いが、『雑談抄』には「愚老」という自称が頻出する。この語は中国で早くから謙称として用いられ、日本でも平安時代後期の『明衡往来』などにあらわれ、『玉葉』には九条兼実晩年の自称として使われているが、中世に入ってから老僧の自称としてさかんに用いられるようになった。一般に、身分の下の方が上位の人に対して何かの意見を述べる時に、謙辞として愚・拙などの文字を、自称に用いることは少なくない。しかし、或る文章の作者が、不特定の読者に対して謙辞をさかんに使用するようになるのは、中世に入ってからではあるまいか。『愚昧記』『愚管記』『拾遺愚草』『愚管抄』『愚迷発心集』『魚魯愚鈔』などをはじめ、書名に愚の文字を入れることは、中世に入ってからさかんになる。

愚という文字を謙辞に用いることは、漢籍の中では早くから定形化されていたと考えられるが、日本人の間でさかんになるには、中世的な著者の意識が成立してからのことと考えても、そう荒唐な想像ではないのではあるまいか。塵、芥、などの文字をはじめ、謙遜、卑下の意を含んだ書名が、中世に入って目立って多くなることはたしかで、『沙石集』『雑談集』といった題名もその例に洩れないことはいうまでもない。

先の概観でわかるように、「愚老述懐」という段は、都や鎌倉の権勢ある寺院との繋がりをなくしてしまい、経済的に窮迫した長母

寺に住みつきはしたものの、世間の人々からもの数に入らぬ人間として蔑まれている無住が、自分は出家者としての僧侶たちから外れた人間なのであるが、出家者でなければ世間の人間かといえはそうでもなく、遁世者なのであるから、僧侶として正体もない者という批判は当を得たものではなく、世間並みの人間でないと非難されても迷惑であるということを述べた段であり、その主張の仕方が終始弁明、弁解の形をとっているところに特色がある。

如形三学齊く修之志有之。然ルニ身病体、心懈怠、有学無行。但シ如病導師、同法ヲ教訓可責ス。然ルニ不法ノ仁ハ多ク、如説ノ僧ハ少ナシ。此事凡夫ノ力不可及。然ルニ、或ハ親類ノ僧、同法・不法ハ、愚老ガ無教訓無正体故カト思テ譏之。⁽²⁾当寺ニ有因縁故歟。相通事四十三年、無縁ノ寺常絶煙、衣鉢・道具之外無資財畜。世間ノ人ノ心ハ、非人ノ如ク思合ヘリ。⁽³⁾といった文章はその例であらう。

愚老当国ニ通事、及四十三年。人皆厭怠ノ思アルベシ。サレバ、逐年親近スル知音、在家・出家希也。尤モ可然事也。⁽⁴⁾という文章を見出すこともできる。

無住が、弁解、弁明の形をとって主張することは、第一に、自分は正規の僧侶から外れたあり方をしているが、遁世者として仏の教えによく従っており、仏教者としては間違っていないということ、第二に、自分は世務に疎いために貧窮の生活をしているが、貧の生活は仏の教えそのままの生き方なのだという二つのことを中心にしていると見てよい。つまり、出家者の世間と、俗人の世間との両方に対して、そのいづれでもない遁世者の立場というものを説明しよ

うとしているわけである。

ところで、無住はかつて、清貧を説き、その主張を実践した聖者として高く評され、東洋のフランチェスカともいうべき高僧であったと論じられたことがあるが、⁽⁵⁾そうした無住論の論拠は、専らこの「愚老述懐」にあった。それならば、述懐の中で無住は、遁世者の自由の境涯をこの上ないものとして積極的に語り、遁世生活の愉しさを称賛しているのかというところではない。例えば、

ヘツラヒテ、富メル人ヨリヘツラハデ、マツシキ身コソ心ヤスケレ。⁽⁶⁾

という歌の詠みぶりは、貧しい生活を心やすい生き方であると慰めるものであって、貧こそ仏の教えそのままの姿であることを積極的に説いているものではないように思われる。つまり、無住は、人間のあり方には、在家・出家・遁世の三段階があり、在家と出家とがいずれも世間の立場を脱していないのに対して、遁世は何物にもとらわれない仏の境地をめざすものであると説きながら、⁽⁶⁾積極的に遁世を賛美する書き方を見せていない。

無住の書き方は、在家の人々から乞食、非人のように思われているが、自分はただの乞食、非人ではないことを饅々述べる書き方であり、出家の僧たちからは、正体もない無能者のようにいわれているが、自分としては遁世者になるより他に方法がなかったのである、よく考えて見ればそれが最も仏の教えに近いものであったという運びになっている。つまり、主張は極めて消極的な言いかたでしか述べられていない。

貧キヲ、ナニカナゲカム、心アラバ、ステテモ、カクゾ、アル

ベカリケル。

ヨシヤゲニ、貧キ家ゾ、ヲノヅカラ、世ヲノガレタル、スマイナリケル。

マコトシキ、ナケレド、マツシサノ、恥カクシニゾ、世ヲノガレヌル。

世ヲスツル、形トミエテ、墨染ノ、袖ハマヅシキ、ハチカクシカナ。

というような『雑談集』の歌は、恥を取り繕い、隠すといういい廻しで遁世の姿をのべているのであり、仏を賛歎して自分がその仏とともにあるというようにいい方をしているのではない。とすれば、清貧の聖者、東洋のフランチェスカというのは、やや過褒の言ではあるまいか。

四

無住が、遁世の生き方こそ、仏の心に叶った最高の境涯であると高らかに宣言するのではなく、出家の集団から脱落し、世間からも没落してしまった自分は、遁世の姿になるより他に仕方がなかったといういい方しかしていないことは、以上の通りであるが、ここで弁明、弁解のいい廻しについても少し考えてみたい。

一般に弁明、弁解という形式は、世間一般や周囲の人々に対して、自分は違ったあり方をし、考えを持っていることを主張する場合に用いられる。自分だけは一般のあり方と違う生き方をしているという主張は、自己を客観化して認識することを前提にしており、強烈な自意識に裏付けられたものである必要がある。弁明、弁解の

形で自己主張をする場合には、直接的な自己主張の場合よりも、主張する相手は具体的に明確であることが多く、己の対象化は進んでいるはずである。また、完全に孤獨な立場で自己を弁明、弁護するということはなり立たないであろうから、自問自答の形で現れる弁明、弁解では、自分自身を対象化して眺める意識がなければなるまい。

われわれは中世においても、日蓮や虎関師鍊の文章にみられるような、自己肯定に立った直接的な自己主張とは別に、無住に見られるような自己主張の仕方を見出すことができるわけであるが、そうすれば、「愚老述懐」の第二段、つまり本体をなす部分が、自叙伝的な内容を持っていることも当然と考えられるであろう。無住は、自己の生涯を対象化して眺めることを通じて、出家の集団から脱落した自分を告白し、世縁からも遠ざかってしまった自分の生き方を客観的に見つめ、晩年の回顧として、自分の生涯は、それより他にありようがなかったのだと主張する。

そこで、無住の自叙伝はどのような書き方をされているかを、もう一度眺めておくことにしたい。無住は、述懐の中で自分自身が、嘉禄二年丙戌十二月二十八日卯時に生まれた者であると記している。その前夜無住の父は、夢に現れた人から「今夜此里ニ生タル者ハ、大果報ノ者也」と人から告げられた。ところが、無住が生まれて間もなく、源頼朝以来の有力な武家であった無住の家は、「運尽テ夭亡シ了。仍其跡継事ナシ」という状態に陥り、無住は十三歳で鎌倉の寺に入ることになり、十五歳以降関東の親類の所を転々とする運命を辿ることになる。つまり、父が無住の将来について聞いた

夢のお告げは、全く当たらなかった。「愚老述懐」は、遁世者としての自分の生涯が、父の夢のとおり「大果報」の生涯であつたのか、そうではなかったのかを考えることを軸にして書かれて行くわけで、今八十年に及ぶ自己の生涯を回顧してみると、父が無住に關して見たという夢は、当たつていたと考えるべきであり、自分の一生は、考えようによつては大変な果報者の生涯であつた、というのがこの段の主題なのであつた。

「愚老述懐」は、無住が、告白、弁明、弁解の形で自己を主張する過程で、自己を客観的に認識しようとした無住の心の軌跡であつたといえるが、問題は、

コトハリハ、サルベキコトト、思ヘドモ、身ノマヅシキモカナ
シカリケリ

カカルコソ、世ヲノガレタル形ヨト、思時コソ、身ノ貧サハナ
グサマレケリ

というような歌に見られるように、考えようによつては果報者であるという主張にある。つまり、完全に一つの価値観に立てば、考えようによつては果報者といういい方が前面に出てくることはないはずであり、積極的な自己主張の形をとることになるわけであるが、無住は、在家でもなく、出家でもなく、遁世であるといひながら、在家、出家の世界の人々に対する弁明、弁解を続けるところに、考えようによつてはという文章が出てくる原因があるように思われる。また、無住の文章を読んで行くと、弁明、弁解が、在家、出家の人々に対するものだけに終わらず、究極では遁世の人々にも向けられていることがわかるが、そこに「愚老述懐」の根本的な問題が

あつたと考えられるのである。

無住が、在家・出家・遁世という三段階で人間のあり方を考えていたことは先にふれたが、在家と出家が現実の存在であるのに対して、無住が思い描いたような遁世は結局存在しなかった。

古ノ遁世ノ人ハ、仏法ニ心ヲソメテ、世間ノ万事ヲワスレ、近代ハ世間ノ名利ヲ忘ズシテ、仏法ハスタルルニコソ。カカルマニ遁世ノ名ノミアリテ、遁世ノ実ナシ。

というような現実の遁世への批判は、『沙石集』でも『雑談集』でも繰り返し述べられている。従つて、無住は確固たる立場で、遁世の果報を主張することができなかった。弁明、弁解は、在家と出家に向けられるだけでなく、遁世の人々にも向けられることになり、その場合特に、自分だけが周囲の人々と違つていふという思いが鮮明に意識されることになつたものと考えられる。在家の人間ではなく、出家の僧でもない、その立場を説明することに特別の困難はなかつたが、自分は遁世者であるといひながら、ただの遁世者ではないと主張することはそう簡単なことではなかつたに違ひない。

五

以上、無住が、自己を対象化することをてがかりにして、自己主張をしたことを見てきたわけであるが、ここでそうした自意識の流れについて考えておきたい。

まず、人物の生涯を客観的に記述した伝記の問題を見ておくと、国史の中には、一定の基準以上をみたす人物の伝記が、その人の死亡の記事の後に書き込まれ、一般に卒伝と呼ばれている。その簡略

な伝記は、正史に伝を載せられるという榮譽を得た人物の事績を顕彰するために、一門の人々や法流を汲む弟子たちによってまとめられ、提出された年譜をもとにして書かれた。それは自己を客観化する営みとは結びつかない。

他方、平安時代の文人貴族たちの中には、源順の「無尾牛歌」のような自己弁明の文章を書いた人々があり、その先駆には山上憶良の「貧窮問答歌」などがあるが、鎌倉時代に至るまで自己の対象化を進めて、生涯を回顧する自叙伝が書かれることは少なかった。鎌倉時代はじめの重源の『南無阿彌陀仏作善集』や、寂尊の『感身学生記』は、作善や戒行に精進した記録という点でここである自叙伝とはやや異なる面を持っているが、それは別としてもやはり例外的なものである。

中世に入ると、禅僧の活動が活発になり禅籍の輸入がさかんになると、その中で禅僧の年譜がよく読まれるようになった。中国の禅僧は自撰の年譜、自歴譜を作ることが多く、自撰の年譜がない場合には、弟子たちが師の生涯を記述することが多かった。

無住の「愚老述懐」の自伝的な記述は、無住が関係を持った東福寺で閲覧した、禅僧の年譜に触発されたものと考ええることもできる。しかし、それはそうとしても、八十歳になって、自分の生まれた年月日と時刻を書き、生まれた時の父の思いや一族の状況を書くことのできる人間は、中世にどのくらいいたであろうか。

自分の伝記を記述するには、明確な自己意識がなければならぬと思われるが、中世における自我の意識は、複雑なあり方をしていただろうし、その性格はまだ充分に解明されていない。私は、かっ

て中世的な自己意識の成立を、貴族社会の停滞と没落の中で、先鋭に捉えることのできた人々として、知識人貴族、具体的に言えば専門的な歌人などに最も鋭く現れるものと考えた。貴族社会の文化的な遺産の継受の中で、専門的な歌人たちが感じた孤独感、個人の小ささを感じるところから来る無力感がその契機になると考えたわけである。そして、またもう一つの個人意識の道は、阿彌陀如来のような仏に対する人間の自覚という形で現れるように考え、親鸞の自己意識はそうしたものの最も鋭い例であろうと考えた。

ところで、ここで見えてきた無住の場合を考えて見ると、遁世者としての無住が、周囲に対してもった違和感は、家業、家学といった貴族文化の専門化の中から生まれる自己意識とは違い、選択専修を支える仏と対しての自己意識とも違っている。無住の自己意識は、まず東国武士の世界からの脱落を基礎としている。没落武士の家に生まれた無住が、東国の武家社会の中で抱き続けた違和感は、無住の自己意識の根底にあったに違いない。無住はその没落意識を背景に出家し、さらに遁世の身となった。しかし、遁世者無住は、京都や南都の寺院の世界に入って行くことができず、京都と鎌倉の間の地である尾張で後半生を送ることになった。南都北嶺の仏教、高い権威を持つ貴族文化の文化圏から見た周縁的な土地で、武家社会からの離脱感を持ち続けたところに、無住の自己意識が成立する基盤があったと考えられるのである。

貴族の専門的知識人の中で生まれる自己意識は、専門的知識を持たない人々に対する優越の意識、つまり、地位と名譽を得てしかるべきなのに、現実はそうではないという意識に支えられている。ま

た、親鸞のような場合には、絶対の阿彌陀如来と自分との関係だけになり、世俗的なものはすべて消えてしまうために、弁明、弁解は出てこない。

そうした中で無住の場合を考えて見ると、弁明、弁解という自己主張の仕方が、鎌倉時代のある種の思想の表現として大きな意味を持ち、そのあり方が、日本人の思想の表現の形として大きく深い流れになったことの意味を考える必要があるように思われる。

注

- (1) 『雑談集』（山田昭全、三木紀人校注。三弥井書店。）一〇六頁。
- (2) 『雑談集』一一一頁。
- (3) 『雑談集』一二〇頁。
- (4) 橋川 正「貧聖無住のことも」（『芸文』大正一五年三月）。
- (5) 『雑談集』一一三頁。
- (6) 『沙石集』卷三の八、「梶尾上人物語事」など。
- (7) 『雑談集』一一五頁。
- (8) 『雑談集』一一六頁。
- (9) 『沙石集』卷三の八、（岩波・日本古典文学大系『沙石集』）一六三頁。
- (10) 『日本人物史大系・中世』（朝倉書店）の序論。

（東京女子大学教授）